

---

# ミッシェル君のオシゴト

槇原勇一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミッシェル君のオシゴト

### 【Nコード】

N3129L

### 【作者名】

槇原勇一郎

### 【あらすじ】

市民生活の向上を目的とするお役所、スペルファ王国首都護民局に努めるミッシェルの華麗なる破綻論理仕事術をご紹介。

## クレーム対応 その1（前書き）

いったいどんな話になるのか、作者にも分からないコメディ作品。行き当たりばったり度MAXで書いております。つうか落もつけられるのかどうか不安！あとは破天荒なミッシェル君次第ということ。ああ・・・思いつかんっ！

## クレーム対応 その1

今日も王都護民局の受付は多くの貧困層の市民たちでごった返していた。と言つても、ここ数カ月のことで、本来は護民局など暇な事この上ないお役所なはずである。

スペルファ王国の王都護民局の仕事は、王都に住む市民たちの生活水準の向上である。と言つても、市民はそんなものは本来何も期待していない。期待する必要もない。豊かなスペルファ王国の国王のお膝元にあつては、生活水準の向上など市民の独力でどうにかなることであつた。富裕な商人たちは利益の一部を慈善組織に寄付している。巨額に上る寄付金によつて、インフラの整備が進んでいるし、文化事業も盛んである。お役所に期待されるのは、せいぜい市民同士の小さなトラブルの仲裁ぐらいのものだった。

それが、ここ数カ月やたらと忙しくなつたのは、異常気象によつて農産物が大打撃を受けたからだ。富裕層の商人たちも余裕がなくなり、慈善組織への寄付を差し止めたし、食料も不足し始めた。食料の生産や流通に関わる産業は大打撃を受け、またそれ以外の分野についても、不況のあおりを受けて、街には失業者が溢れている。仕方なく、王国政府は国庫を開いて市民たちに食料を提供することにした。一人一人の生活状況を把握して、それに応じた配給を行うという面倒な作業が普段ほとんど働いていないと言われるこの役所にあてがわれたのである。

「はいはい、ちゃんと並んでくださいね・・・そこっ！割り込みをした人は申請を受理しませんよっ！帰った帰った！」

応対しているのは、まだ二十代前半の若い女性であつた。ここ数年

で首都政府のお役所には女性の職員が詰めるようになった。護民局の局長は王国初の女性局長で、それにより女性の積極採用が始まった。受付の娘もその流れで採用されたのである。娘の名はレオノーラ・デ・リベラ。二十二歳である。王立女学院を出て新卒採用されたばかりである。

「はい。ええと・・・先月までは倒産したブラニク繊維工場で働いておられたんですね。年収は・・・三百五十万グルドで今は無職・・・ご家族は奥様とお子様三人、足の不自由なお母様もおられるのですね。大変ですね・・・本来は離職後二ヶ月は配給を受理できないのですが、事情が事情ですので半分程度は受けられるかもしれません。検討に二、三日かかりますので、四日後にもう一度きてください。え？早くと言われましても、手続きにはどうしても時間もかかりますので・・・」

丁寧に対応しても、不満を言うものは尽きない。レオノーラのストレスは日々募るばかりである。

夕方、時間外の対応を求める市民たちをどうにか追い返してその日の受付は終了した。

「お疲れ様。入局したばかりなのによくやってくれているわ。大助かりよ」

「は、え、ありがとうございます」

話しかけてきたのは、王国初の女性局長パス・デ・ルシアである。若干二十九歳。男性であっても局長クラスのと要職につくことは難しい若さである。出自の良さと、短期間で積み上げた行政処理の実績

からの大抜擢であった。

「来月にはルワーズから大量に食料を輸入できるって話よ。三分の一は引き続き私たちが配給を請け負うことになるけど、残りは慈善組織が引き受けたり、安価に市場に流すことになるから、少しは楽になるはずよ」

「いいですねえ。通商局は・・・こんな泥臭い仕事じゃなくて、そういう大きな仕事ができる。抜本的な解決に結びつくことをやるにはそういう部署にいないと・・・」

「あら？護民局で採用されたのはご不満だったのかしら？」

「い、いえ・・・そんなことは・・・」

レオノーラはうつむいてしまった。そもそも女性を積極採用しているのは護民局ぐらいのもので、通商局などに行けるはずはなかったし、レオノーラ自身はパスに憧れて、はじめから護民局を志望していたのだ。だが、これほど面倒で不毛に思える仕事をさせられるとは思っても見なかったのである。

「ふむ。レオノーラよっ！泥臭い仕事に嘆くことなどない！その泥臭さこそが神聖なる意味を持つのだっ！」

突然、同年輩の男が大げさなポーズを取ってレオノーラの肩を叩いた。やたらと（本人としては）威厳を込めた口調で、なにやら演説を始める。

「我々役人の仕事とは何かっ！我々は直接市民生活を支える生産的な仕事に寄与しているわけではないっ！我々が仕事をしなかったところで、それほど大した問題にはならないのだっ！」

「それつてもものすごく嘆かわしいことなんじゃ・・・って、今の貧困対策は大きな意味のあることですよね？」

「意味などあるものかつ！国庫を開いた時点で慈善組織に業務委託をすれば、我々が慣れない審査業務などを担当する必要はまったくないっ！」

一言しゃべるごとに、意味もなく奇妙なポーズを決めている。今は片膝を付いて、バレエダンサーさながらにピンと右手をまつすぐ横に伸ばしている。つい先程までは、両足を交差させてつま先立ちになり、やはり指先までピンと上と横に腕を伸ばしていた。何がやりたいのかは誰にもわからない。

「じゃあ、どうして、神聖なる意味があるのですか？」

「この仕事をする事によって、我々は市民一人一人の不満を聞くことができるっ！配給を受けに来ながら、消費者面でクレームをがなりたてる連中の言うことが聞けるのだっ！考えてみよっ！慈善団体にそんなことはできるか？『助けてもらっている』と思える相手に文句を言うなどできるはずはない。助けて当然でそれをやっていないと思われている我々だからこそできることなのだっ！」

「じゃあ、私たちって市民のストレス解消のためにこんなことしているんですか？」

ふかーいたため息をつきながらレオノーラは憂鬱な口調で言った。

「違うっ！」

「じゃあ、いったいなんのために？」

「わからないでかつ!？」

「わかりません」

「それだっ！」

「えっ？」

成り行きを見守っていたパスも思わず声を上げた。いつもながらこ

の男の言う事はよくわからないが、レオノーラのネガティブ思考を少しでも別の方向に向けられるならと思っただけで放置していたのだ。

「こういう機会があれば、我々は頭を使うことができる。普段は悩ましいこともなく、のうのうとくだらない話をしている我々が、なんと自分の境遇を嘆いたりため息をついたりできるのだっ！なんと素晴らしいことではないかっ！」

まるで神託を伝える神官か軍隊を激励する指揮官のように堂々たる態度で右手をかざしながら言う。

「いえ、ですからそれがなんで素晴らしいことなんですか？」

「日々無感動に過ごしている我々がなんと悩むことができるのだっ！とても素晴らしいではないか！」

「私は忙しくなくなっただけで無感動なんかじゃありませんよ」

レオノーラはまた短く嘆息した。

「ま、あなたは入局していきなりこんな状態だから。過剰演出は別にして、ミッシェル君の言うこともあながち間違いじゃないわ。なんにもすることがないくらいなら、文句いいながらも忙しく働いている方がまだしもマシってものよ」

まるで学塾の生徒に何かを教えるような口調でパスが言う。机に腰掛けて足を組み、腕を組んで右手でメガネを触りながらいうところなど、いかにも女教師でサマになる。と言っても、一般的なイメージではなく、地下劇場で男性向けに上映される如何わしい官能劇のたぐいで登場する女教師だ。

「でも、その神聖な仕事をまったく手伝ってないミッシェル君が言

うのもどうかと思うわよ?」

「私も忙しいのです」

「忙しいって・・・苦情処理も放り出していったいなにやっているわけ?窓口処理は新人の仕事だからうるさくいつてなかったけど・・・」

「大事な計画を立てているのです!」

相変わらず妙なポーズをこまめに変更しながら話を続ける。かなりうっとおしいが、パスは慣れていた。

「そう・・・不満タラタラの市民たちを少しでも励ますための・・・」

「一体何を?」

ミッシェルは華麗に三回転のスピンを決めて二人に背中を向け、次の瞬間、ぱっとジャンプして、両足を開き、前屈してまたの間から顔を出しながら質問に答えた。

「それは第二話で!」

「は?」

一体何を言うつもりなのか・・・

## クレーム対応 その2

「考えてもみたまえ！」

ミッシェルは驚くべき瞬発力で、前屈して股の間から顔をのぞかせている状態から、前方宙返りをして、ピンと直立し、後ろを振り向いてレオノーラを指さしながら言う。

「市民たちの不満とはなんだ？」

「食料の配給に時間がかかることです」

「ちがうッ！」

「ヒッ！」

ミッシェルのあまりにも迫力にレオノーラは後退りする。

「それは、表面上の不満の理由でしかない！そもそも今訊いているのは市民たちの不満の原因ではなく、不満とは何かという哲学的命題だっ！」

「は、はぁ・・・」

「人間とはやつかいなもので、自分のネガティブな感情の原因を自分で明確に理解しているとは限らない！いや、むしろ、ちゃんと自分でわかっているということは稀であろう！今の君がそうであるようにっ！」

「た、たしかに・・・」

レオノーラは考えた。どうして自分がこんなに苛立っているのか、確かに自分でよくわかっていない。通商局でやっているようなでっかい仕事に本当にしたいのか言われればそうでもないし、今の仕事は忙しいとはいえ、体をこわすほどにきついわけでもない。いちい

ち細かいことに気を回さずに事務的に対応していれば、市民のクレームなんかもそれほどストレスにはならない。あれ・・・一体何が不満だったんだろ・・・。

「だが、現に確かに不満などのネガティブな感情は自分で感知できる。その原因がわからないものだから、うまくそれを表現できない！そのため・・・」

ミッシェルは三回ほど側転して、レオノーラに近づいた。ずいっと、顔を近づけながら、喉元に指を突きつけて言葉を続ける。

「表現しやすい問題に置き換えて不満を口にするんだ。例えば今君が不平不満を述べたように。実はそれほど忙しいことにも、通商局みたいな仕事ができないことにも大きな不満はないだろう？」

図星である。

「君の場合は、自分がそうした原因のすり替えを無意識にやっていることに気づけば、本当の問題の解決につなげることができるだろうが・・・」

「私の本当の問題って・・・」

「おだまりっ！今はそんなことはどうでもいいっ！！！！」

「どうでもいいって・・・」

「市民たちについては、一人一人の自分でも気付いていない不満の内容を知ることなど不可能っ！また、本人たちに気づかせるというのも不可能っ！ではどうすべきかっ！？」

ミッシェルはますますヒートアップしていく。レオノーラは引いているというよりも、恐怖を感じて顔が引きつっている。

「どうすべきなのよ？」

聞いてきたのはパスでたいした意図もない。

「今のところ、食糧不足と言っても、特別餓死者がでてきたわけはありません。栄養状態もむしろ飽食の状態から、多少健全なレベルに落ち着いたくらいです」

「保健局の調査によるとそうらしいわね」

「ですから、多少無茶なことをしても、それほど問題ありません」

「んなわけないでしょ・・・内容にもよるけど・・・」

ミツシエルは上司の声など聞こえていないかのように続ける。

「結局のところ、我らがレオノーラ嬢のお悩みは、市民たちの負の感情を目の当たりにしたことにあるのでしょう。世間知らずのお嬢様にはいくら頭脳明晰であっても、こんな状況は耐えられるものではありません。負けず嫌いでそれを認められないから、不平不満として表現されてしまう・・・」

「本人目の前にしてそんなきっぱり言わなくても・・・」

すでにミツシエルの眼中にはレオノーラの姿など入っていない。

「市民たちの負の感情の方向を別の方に向けてしまえばいいのです」

「世論操作の常套手段ね・・・」

「市民たちが役所の非効率に不平不満を言うのも、レオノーラ女史と同じ理屈です。施しを受けると言うことにプライドが傷つくのを抑えるために、『国家から受けられる当然の権利』として、配給の受け取りを自己正当化し、クレームをつけることによって、権利者としての威厳を保とうとするのです」

「あながち間違っってはなさそうね」

「ですから、別の方法で権利者としての優越感を満足させてあげればいい」

「どうやって?」

もはや、セリフのごとに変わるポージングを説明するつもりは作者には毛頭ない。

「我々がプライドを捨てるのです!」

「は?」

「公務員などと言うのは、所詮は市民たちの下僕っ!そう思わせることができればいいのですっ!」

「・・・で、どうやって・・・」

「明日から・・・」

「明日から?」

「全裸にボディペインティングして受付をしましょうっ!!!」

「あほかっ!」

女性二人のドロップキックがツープラトンで決まり、ミッシェル君は深い眠りに付くのだった。

## クレーム対応 その2（後書き）

前置きが長いわりに・・・オチが・・・オチが・・・  
次回以降、もうちょっとエッチな話とかも入れていこうとは思いますが。

**未成年労働者（前書き）**

今回はレオノーラ女史の一人称視点で。

## 未成年労働者

私はレオノーラ・デ・リベラ。二十二歳の新米公務員。スペルファ王国首都護民局に努めて半年。研修が終わるか終わらないかのうちに大凶作で首都はパニック状態になり、その対応に毎日追われてあつという間に数カ月が経った。

今は隣国のルワーズ公国から空前の規模の取引が成立して、大量の食料が輸入できたのである程度落ち着いている。食料の配給も、三分の一は民間の慈善組織が、もう三分の一は安価に市場に出回るようにしたために、私が担当するのは残りの三分の一の分配だけ。それも、慈善組織が動き出すと、お役所でめんどくさい手続きをするよりも簡単に配給を受けられるので、実際には輸入前の二割ぐらいまで窓口業務は減っている。

「ああ・・・暇だわ・・・」

思わず口走ってしまふ。なんて自分は身勝手なんだろう。少し前までは忙しくて目が回りそう、ブツブツ文句を言っていたのに。破天荒すぎてよく分からないミッシェル先輩の言っていたことがなんとなくわかってきた。忙しい方がまだしもマシなんだ・・・。

実を言えば今更「ミッシェル先輩」などと言うのはなんだか照れくさい。ミッシェル・デ・セルバンテスとはもう二十年来の付き合い。いわゆる幼馴染だ。それどころか、私の叔母の息子だから従兄弟にあたる。近所に住んでいたのもあって、一つ年上のお兄さんと言う感じで、呼び捨てが当たり前前の関係だった。

わかっていた・・・この人は・・・変人なんだって・・・。頭はい

い。自分でいうのもなんだけど、わたしだって王立女学院を次席で卒業している。でも、ミツシエルはそれどころじゃなくて、十五歳で飛び級で王立行政学院に入学し、十八歳の時に主席で卒業した天才児。それがどうして閑職の代名詞と言われる首都護民局の平役人なんてやっているのかはよくわからないけど、たぶん、パス・デ・ルシア局長のスカウトなんだとは思う。でも、入局後は大した実績を上げたって話も聞いていない。

局内の彼に対する評価といえば「天才と力は紙一重で彼はバリ」って言うもの。いっつも小難しい理屈を捏ねるのはいかにも秀才っぽいんだけど、まともな結果につながったことはないんだからでも、たまにすっごくためになることを言ってくれるし、変人でそれほどイケメンでもないんだけど、ちょっとカッコよく見えることはあるのよね。

「あの・・・すみません・・・」

などと言っくだらない考えを巡らせていたら、突然暇な窓口にお客さんが現れた。

「あ、はい。なんでしよう？配給のお申し込みですか？」

「いえ、臨時職員の募集記事を見て来ました」

護民局の臨時職員の募集は配給のために急に忙しくなってきたために始めたのだけれども、対応が遅くて肝心の時期には間に合わなかったから全く無駄足。今になって必要かというところでもないから、やんわり断ろうかと思っただけ・・・。

あら、綺麗な人・・・私よりは一つ二つ若いかしら・・・高価じゃないけどきちんとした服装をしているし、話し方もしっかりしてい

るわ……。

「ええと、はい。一応まだ募集期間ですが……」

「あの、年齢制限とかがあってありますか？募集記事に書いてなかったから……」

募集記事を作成したのはミッシェル。募集自体遅かったしいい加減なんだから……。

「ええと、一応ありますけど、十五歳から五十歳までですから大丈夫ですよ」

「……十五歳……」

「？」

どうということだろう？本人じゃないのかな？

「ご身内の方が応募されるのですか？」

「……いえ……私本人です……あの……私……まだ十一歳なので……」

「えっ!？」

どう見たって二十歳前後、若く見たって十七ぐらいには見えるわよっ!

「えっと……十一歳？」

「はい。年上に見られることも多いんですけど……」

「どうして、働こうと思ったの？」

普通ならここで門前ばらないのだけど、暇なのもあって、つい聞いてしまった。

「私、生まれてまもなく母が亡くなって、昨年事故で父も亡くなりまして……どうにか自分でちゃんと生活出来ないかと思って……」

「……お気の毒に……でも、あなたの歳なら就業よりも保護施設に入るか、養子縁組とか……」

親戚に身を寄せるってことができないから、ここに来たのだろうか、そんなことは聞けないわね。

「両親が残してくれた遺産はあるし、使用人もいるから生活には困らないんです」

「だったら、別に働かなくても……学校だって行かないといけないでしょ？」

「学校はこの春に卒業しました」

「一年飛び級で幼年学塾を出たってこと？でも、中等学塾までは義務教育なんだから……」

「いえ、この春に卒業したのは高等学塾です」

「！」

と言うことは、ミッシェル以上の早熟の天才じゃない。どんだけ飛び級しまくっているのよっ！

「遺産もあって、そんだけ勉強ができたなら、飛び級で王立女学院にだって特待生でいけるんじゃない……」

「でも、早くちゃんと働きたいんです。特待生のお話はいただきましたけど……」

無茶な話だ。これだけ賢い子なのだから、自分が無茶を言っていると言っこともわかつてはいるのだろう。意を決してここに来たこと

はわかる。

「なにか深い事情がありそうね。いいわ。とりあえず、そのあたり、面接で聞きましょう。奥にいらっしやい」

突然、私の背後から声がした。パス・デ・ルシア局長だ。

「レオノーラさんも、窓口はもう終りの時間だから、一緒に立ちあつて。あ、それから・・・」

「もちろん、私も立ち合わせいただきますよ！」

「ヒッ！」

驚いたのは私ではなく、面接に来た女の子。突然降ってわいたようにミッシェルがルシア局長の背後に現れた。若い子を怖がらせるんじゃないっての。

「さて、まずは、お名前からうかがいましょうか」

コーヒーの匂いが立ち込める応接室で面接は始まった。そもそも対象年齢外の未成年を面接すること自体正式には労働規約違反だから、これは単なる人生相談みたいなもの。こういう規格外の動きをするのはミッシェルだけでなく、ルシア局長の悪い癖ね。

「エレナ・デ・トーレスです」

「つて、デ・トーレス財団の関係者？」

「はい。父は生前デ・トーレス財団の理事長を勤めてました」

デ・トーレス財団は王国でも最大級の財団で、主に絹織物の取引で

財を築き、国内の様々なインフラ整備にも出資している。理事長ともなれば王国でも屈指の財界人だ。

「ふむ。エレナさん、普通余程の事情がない限り、十五歳未満の就労は認められません。これは、民間でも同じことよ？両親が居ないとは言え、経済的に困っていないあなたが働きたいと言っるのはどういう理由からかしら？」

オドオドするかと思ったら、エレナちゃんはきっぱりと淀みない口調で話し始めた。こりゃ立派なもんだ。女学院も飛び越して一気に就職までつてのもありかもとか……。

「私の後見人は父方の叔父になっています。現在のデ・トールレス財団の理事長を務めているサルバドル・デ・トールレスです」

「まあ、未成年のあなたが自分で資産を管理するわけにはいかないものね。何をするにしても身元引受人は必要だし」

「はい。でも、十八歳未満であっても一定以上の収入を自力で得られるようになれば、法的には成人同様の扱いを受けられると言っ規定があつたかと思えます」

法律の知識まであるんだ……そんなマニアックな法令なんて私もろくに知らないわ……。

「たしかに。民法付則第四十二条第五項に『十八歳未満であっても、高等学塾新卒者の平均初任給を超える収入をえている者は、特例成人として本人の申請により、資産法上、成人と同様の権利を与える』とありますなっ！」

さすがミッシェル……そんなこと法務局や大審院の職員だって暗記してないわよきつと……。

「と言っても、まあ、条文には明記されていないけど、基本的に十五歳以上の年齢に達している人が前提の話よ？そもそも十五歳未満の就労自体は認められてないんだから・・・」

「私名義の資産運用でも収入は得られますが、資産運用自体が後見人の許可の元に行われるので、私が自分で得た収入にはなりません。ちゃんと働いて得たお金じゃないと・・・」

「うーん・・・そもそもどうして、特例成人になりたいの？叔父様とうまく行っていないのかしら？」

当然の質問だけど、私じゃ聞けないな。なんかネガティブなエピソードの予感がするもの・・・。

「叔父はちゃんと私の後見人として財産を管理してください。父が残したものに手をつけたりも決してしません。信頼してお願いします」

「じゃ、どうして？」

「私は財産を放棄したいんです」

「は？」

「叔父は真面目な人ですから、父の財産は私が成人した時点で全て返すつもりです。でも、この不況のせいで、デ・トレース財団も叔父も借金を背負っています。父の財産があればどちらもどうにか出来るものなんです。父だって、叔父に困ったときは遠慮なく使ってくれと言っていたのに・・・」

「どういう十一歳だろう・・・」この不況のせいで』とか・・・ませているって言うよりも、立派に大人の印象よね・・・十歳以上離れているのに私より大人に見える・・・悲しい・・・。

「なるほど・・・あなたの事情はわかりました。つまり、特例成人

となつて、自ら叔父様に譲渡すればその借金の穴埋めができるはずだと……」

「はい。そうです。私の意思で半分を叔父様に譲渡、残り半分を財団に寄付したいと考えています」

よくもまあ、ここまで考えるもんだ……。

「ふうむ……たぶん、それ……無理ね……」

「えっ？どうしてですか？」

この辺はやっぱ子供みたいね。大人の事情には通じてないわ。

「そんな真面目で人情家の叔父様が、素直にあなたからの譲渡を受けたりするかしら？まして、特例成人の申請は収入のある子供を金づるにしようとする保護者から子供を切り離すためにあるものだから、あなたの意思で申請できるけど、労働規約の特例申請には保護者の許可が必要よ」

「それは……そうですが……」

わかってんだっ！わかってるんだけど、ここに来たと……。うーん。

「ふうむ……しかし、方法はありませんぞっ！」

来たっ！ミッシェル……すでに話し始めると同時に机の上に飛び乗っている。セリフは軽やかに机上でトリプルアクセルを決めてから、エレナちゃんの顎に人差し指を当てて……いや、ちよつと……顔近いでしょ……エレナちゃん顔真っ赤でしょ……あれ？

……あんたまでなんで顔赤くしているのよっ！相手は十一歳よっ

！大人びてたつて子供なのよっ！女子高生が可愛いとかとはレベルが違うのよっ！ロリコンかっ！

「美しい・・・美しいあなたが若くして働く方法はちゃんとありますぞっ！」

「いったいどうすればっ?!」

なんだかエレナちゃんが目をキラキラさせている。手をあわせて、神様でも拝むかのような感じだ。あの年頃の女の子がイケメンの舞台俳優に憧れるのと同じような感じ・・・。

「叔父上が保護者資格を失えばいいのです。そして、代理の後見人に収入あまりない人物を選ぶっ！これで全て解決しますっ！すでに借金があるというのなら、破産宣告でも受ければ一発ですっ！代理には我々が適当な人物を見つけましょうっ！配給処理のせいですっかり貧困層の情報が集まっていますからねっ！」

例によつて机の上でオーバーアクションするのかと思つたら。キスでもしそうな雰囲気やたらと熱い視線をエレナちゃんの双眸に注いでいる・・・変人だとは思っていたけど・・・変態だったなんて・・・。

「ちよつとっ！ミツシエル君っ！」

あ、ルシア局長。流石に止めてくれるんですねっ！この二人の道ならぬ恋っ！

「叔父様を助けたいって相談なのに、その本人を破産させてどうするのよっ！そうならないようにするのが目的でしょ？」

そこですかっ！いや、まあ、そっちの方が重要なんだけど・・・え？私が気にしすぎ？

それはともかくとして、ルシア局長だって論点がずれているような・・・。

「あの、そもそも十五歳以下を護民局で採用するわけには行かないんじゃない・・・そんなことをすべきかどうかの方が問題なんじゃないですか？」

「そこは何とかしますっ！」

「へ？」

「こんな優秀な人材を逃してたまるもんですかっ！」

も、燃えている・・・燃えているわルシア局長・・・人材収集癖って本当だったのね・・・『飼い殺し女帝』ってあだ名も聞いたことがあるけど・・・。

「破産宣告以外にも保護者資格を破棄できる方法はありませんぞっ！」

いつもなら、ルシア局長にポーリングしてみせていうのに、今はエレナちゃんから視線を話さない。エレナちゃんもキラキラした視線を外さない。どうなってんだこれ・・・。

「未成年者の後見人が本人に対し、性的な虐待行為を行ったと疑われる場合、強制的に保護者資格を失うと言う・・・。」

「アホかっ！破産よりも悪いでしょっ！って言うか、この娘を傷物にする気かっ！」

まったく・・・この人は・・・

「それでいいですっ！」

え？

「え、ちょっと、エレナさん、わかっているの？叔父様は性犯罪者のレッテルが貼られちゃうのよ？あなたも性的虐待を受けたと言う形で・・・そりゃあ報道されたりはしないけど、叔父様は名士なんだから噂は広がっちゃうわ。これは大変なことよ。これからずっと変な目で人に見られて・・・」

「子供ですけど、それぐらいのことはわかりますっ！」

あんまりわかって欲しくないなあ・・・この歳で・・・。

「でも、経済的にそれで叔父が助かるなら・・・私のために負担になる財団の理事長を引き受けてくれたんです。私が成人したときに引き継ぎたいって・・・それで自分の借金まで大きくしてしまっって・・・理事長から退いてもそれで経済的な余裕ができるなら叔父の負担をなくすことができます。疑われる程度の不名誉なら叔父は気にしません。実際には事実無根なんですから」

やばい・・・叔父さんは自分についてはそうだったって、姪の先々を考えたならこんなこと耐えられないわ。自分自身ことだってなんだかんだでわかってないわよ。頭じゃ分かる話じゃないもの・・・ん？っていつか・・・

「あの、何も叔父さんをだまくらかしたりしなくても、労働規約特例の申請さえ通せばいいんだから、ちゃんと叔父さんを説得すれば・・・」

「え・・・？」

え……って……三人とも飛び級無しで卒業した私よりもずっと頭が良いはずなんだけど……。

「でも、叔父を説得なんてできるかしら……」

「エレナさん、あのね……どのみち叔父さんに不名誉を負わせるのは良くないわ。あなただってそうよ。いつか後悔する。だったら、ちゃんと叔父さんを説得しましょ？」

「でも……」

突然、ダンつと言う音が聞こえた。

えっ……なんで目の前にミッシェルがいるの？なんで私の顎に指を当てているの？ちかつ！ちよつと……近いつて……顔っ！

「さすがは我が従姉妹レオノーラ……その聡明さ……素晴らし……い……」

いや、ちよつと、なんで私にそんな熱い視線送っているの……ちよつと……恥ずかしいんだけど……。

「どうやって説得する？君ならそこにも腹案があるはずだっ！」

あの……なんだか、エレナちゃんの目線がちよつと怖いんですけど……なにこれ……。

「え……えと、全部が全部本当のことを伝える必要はないんじゃないかないかと。例えば、ルシア局長が彼女を見込んでどうしても臨時職員採用をしたいって頼み込んで、エレナさんがやりたいって言えば……」

「……」  
「どういう理由で私がやりたいと言えばいいんでしょうか？叔父は

私を王立女学院に入れようとしているのですけど・・・飛び級でも入学最低年齢が十二歳以上なので受験を遅らせているだけで・・・」  
ちよつと声もこわいわよエレナちゃん・・・恋敵を見る目で見ないで・・・私はこんな変人そんな目で見たことは・・・

「そのあたりは勉強が飽きたから早く働きたいとでも言えば・・・それぐらいの嘘なら方便と思えるし」

「なるほどっ！さすが我が従姉妹っ！レオノーラよっ！君こそ賢人だっ！」

いや、あんたらが話をややこしくしてただけじゃ・・・過剰に頭のいい人達って自分で問題を難しくしちゃうことがあるんだなあ・・・私の存在意義って常識論なんだろうか・・・。

と言うことで、結局私の提案どおりになってしまつて、翌週からエレナちゃんは護民局の臨時職員に。たいして仕事もないのに・・・窓口業務を担当してくれるから私はますます暇になつてしまつた・・・。

なんだかよくわからないけど、事あるごとにミッシェルとエレナちゃんは熱い視線を交わしているし・・・あれ・・・なんで・・・私イライラしているんだろ・・・いや、ミッシェルが未成年に良からぬことをするんじゃないかといらぬ心配をしないといけないから、それがストレスなんだッ！

「自分の不満の本当の理由は自分でもわからないことが多いってね」

え？あれ・・・何言っているんです？ルシア局長・・・

## 未成年労働者（後書き）

なんだかこれ・・・ミッシェルがポーシング決める以外は全然コメディになっていない気が・・・いや、まあ、とにかく小難しい話をに入れて・・・楽太郎さん（って円楽襲名しましたけど）的な屁理屈ネタをやりたいかっただけなんですけどね。うーん・・・

ここには、語り部のキャラクタのイメージとかを紹介したいと思いません。

レオノーラは「不死騎」のカリスを上品したのとシルヴィアを謙虚にしたのをあわせて若くした感じです。局中唯一のまともな人間という感じで。

が・・・今後、ミッシェルよりも彼女が主役になっていきそうな予感・・・。

ご感想と言つか、何かご指摘いただけるとありがたいです。

## 増税と少子化対策（前書き）

今回は新キャラクター、エリート意識の高いルイス・デ・レオン君の一人称。なんだか語り手を変えながら、一人称で書くのは楽しいですね。毎回別の作品を書いているみたいで。

## 増税と少子化対策

私の名前はルイス・デ・レオン。スペルファ王国首都護民局の職員だ。英才ぞろいと言われる首都護民局の中でもとびきりのエリートだ。いや、英才ぞろいと言われるがこの職員たちはみな変人ばかりだ。どうもルイス局長には人を見る眼がないらしい。ここには学塾の成績は優秀でも常識に欠ける連中ばかりだ。だから、人材を集めているのにろくな成果も出せない無駄金使いの役所になるのだ。

私は違う。飛び級で十九歳で王立行政学院を卒業したあとに二年ほど民間の営利財団でビジネスを行っていた。僅かな間に一千億グルド以上の取引実績を上げて、国家国民のためにあえてこの護民局、影でゴミ局と揶揄される役所に入ったのだ。目的はこの腐りきった役所の改革だっ！いずれは私が局長となって、非常識な連中を全て更迭して、真に市民生活の向上に貢献する重要な役所とするのだ。

さて、今日はなにやら政府本局から草案の作成を依頼された二つの法案についての会議だ。非常識な連中の議論では何も決まるはずもない。間違いなく却下される馬鹿な文書が一綴作成されるだけだ。私が発言してリードしなくては・・・。

「さて、本局から依頼された二つの法案ですが、一つは食糧危機の際の過剰な歳出を補うための効率的で市民に抵抗感のない増税案、もう一つは、晩婚化と少子化に歯止めをかけるための法案です」

この国ではルワーズ公国ほどではないにしても女性の社会進出が盛んになってきている。結果として晩婚化が進み、少子化もいずれは深刻な問題となることだろう。ルワーズ公国ではすでに無視し得ないレベルにまで進んでしまっている。そうなる前に歯止めをかけな

ければならないのだっ！増税の方も市民が不満を抱かない公平な方法を考えねばならない。

「まずは、増税案の方から議論するのがよろしいかと思えます。できるなら、食糧危機の歳出を補うだけでなく、少子化対策の財源にもなるような法案を考えましょう」

ふ、この程度のことでも私がいわねば誰も口にしないのだ。レオノーラ女史ぐらいは考えてはいることだろうが、彼女はあのミッシェル・デ・セルバンデスの従姉妹だとかでどうも遠慮しているようだ。まあ、新人一年目だからしかたないだろう。私は一年目から優秀な役人だったからね。

「あまいっ！」

なっ・・・反論してきたのは奴か・・・って、なんで、俺の目の前に立っているんだ！机の上に立などれだけ行儀が悪いんだっ！っていうか、ちようど俺の顔の前に股間を突き出すなっ！え？背筋を伸ばして腹を突き出しているだけだったって、モノが俺の前のあることにはかわらんだろっ！

「ルイス君っ！君は優秀な男だが常識論に縛られすぎているなっ！」

お前が非常識過ぎるだけだろっ！なんで顔じゃなくて股間を向けてしゃべるんだっ！

「こんな問題が私たちに振られてきたのはどうせどこの役所がやつても、妙案なんて出てこないからね。どうせ実績にならない仕事なら、一番役立たずなところに回せてことよ。他の役所から比べて提出した草案の採用率は半分以下ですからね。うちは」

「局長っ！だからこそ、完璧な法案を出して我々の力示すべきではありませんっ！」

よしっ！啖呵切ってやったぜ！局長も情眠から覚めるべきなのだっ！

「それには異論はないっ！だが、こんな難しい問題を常識などに縛られてどうにかできると思うのかねっ！」

「非常識に考えればどうにかなるってもものではないでしょうっ！」

全くこんなヤツと議論はしたくない。つかれるだけだ。止めてくれよ……。

「そもそも新しい増税案で市民の不満もなしに、歳出の補填と新法案の財源を両方確保すると言うのは無理があるのではありませんか？」

なんだと小娘っ！生意気なことを言ってきたのは、この前入局したばかりの臨時職員だ。名前はエレナ・デ・トーレス。なんと十一歳の子供だっ！どうなっているんだここの人事はっ！

でも……かわいいな……いや……まて、そんな変な意味じゃないぞ……相手は子供じゃないか。単に子供が子供として可愛いと思っただけだ。いくら大人びているっって言っただけ、当然、俺の興味を引くような年齢じゃないぞ。

「同時に振られた二つの課題を二つながら解決する珠玉のアイデアを出してこそ、我々の力が認められると言っものっ！そうではないかね、ルイスくんっ？！」

「そんな案があるというのなら是非ご披露いただきたいものですな」

言ってやったぜ。デタラメ野郎がっ！

「ふん。容易いことだ。出生率の低下は避妊具の普及が直接的な理由だ。女性の社会進出があったところで、物理的に子供ができる可能性を低下させる方法がなければ妊娠の自体が減ることはないっ！性交の全体数自体が減ったわけではないのだからなっ！」

「ってちょっと・・・十一歳の子供の前でなんて話するんだよ。って言うか、そもそもここに子供を呼ぶなよ・・・。」

避妊具の普及は確かにここ数十年の話だ。ペニスを覆う牛や豚の内臓を使った避妊具は近年爆発的に普及している。元来下着として一部の地域で装着されていたものだが、インテグラ王国の殿位が避妊具として開発したものが一般化している。

「保健局のデータでも確かに性交の回数自体は減ってませんね。婚前交渉を宗教的タブーとする風潮がなくなってきましたので、かえって増えているのではないかと思われます。こうした調査への回答には、羞恥心から無回答の結果も多く、無回答者の本当の答えはおそらくは回数が多くなっているのではないかと思われます。ミッシェルさんのおっしゃるとおりですわ」

十一歳の子供がこんなこと言ってくれるな・・・。

「つまり、この避妊具自体に特別税率を適用するっ！高価な避妊具を使わずに性交すれば当然、子供ができる確率は上がるっ！それでも妊娠を避けたければ高い避妊具を買いしかないっ！」

「暴論だっ！出生率はともかく晩婚化の対策になるのかっ！未婚の母が増えたら大きな社会問題になるぞっ！」

「あら、ルイス君。孕ませといて逃げた経験でもおありで？」

「何をおっしゃるんですかつ！局長っ！」

冗談にしてもなんてこと言いやがるんだ。この女・・・

「失礼。今の冗談よ。まあ、一般論としては正しいわ。で、対策も考えているのよね。ミッシェル君」

あるわけが・・・ん・・・相変わらずのうざいトリプルアクセルをしてから、なんだかレオノーラ女史を片膝付いて指し示したぞ・・・。

「ミッシェル先輩の指示でこの課題について検討いたしました。これについては、例えば母子家庭の母親と結婚した男性に対し、経済的援助などの特権を与えることで、既婚率の向上測ることができ、寡婦の数を抑えることができるでしょう」

「血の繋がらない義父からの性的暴力や虐待が発生するかもしれないよ。せんよっ！」

「ルイス君。ここには臨時職員とは言え、十一歳の子供がいるのよ。発言に気を付けなさい」

だったら、会議に参加させんじゃねえよっ！

「いえ、お気になさらないください。その程度のこととは理解しておりますから」

なんつー十一歳・・・

「他の国ならともかく、我が国では性的虐待の疑いがかかるだけで、保護者権利を失います。これはそれを妨げる事のできなかつた母親も同じこと。そうした事態の抑止力にはなりません」

くっ・・・かわいいのに・・・かわいいのに・・・なんでこんなセリフが口から出てくるんだ・・・いや、あくまで子供として可愛いって意味だ・・・そうだよな・・・俺・・・。

「国として、血の繋がらない親子が増えることを奨励すると言っているのですか？」

冷静に考えろっ！非常識すぎだろっつ！

「ルイス君っ！そこが常識にとられすぎだと言っているのかわからないのかねッ！失望したな・・・優秀な男だと思っていたのだが・・・」  
なっ！失望とか言われたくねえっ！

「ミッシェル君。言い過ぎよ。貴方ほど自由な発想は誰にでもできるものではないわ。常識というのは時代の中に存在する通念。普遍的なものではありません。社会のあり方が変われば変わっていくものよ。ミッシェル君の言う事は確かに一見非常識に思えるけれども、未来においてはおかしなことではないかもしれない。いえ、抜本的な対策が他に考えられない以上、そのように常識の方が変わるべきなのかもしれないわ」

え・・・ちよつと、局長・・・。

「それとも、これ以上の結果が出せる代案が貴方にはある？」

そりゃないけど・・・あんまりにも・・・。

「じゃ、決まりね。草案の作成はミッシェル君、レオノーラさん、

それからエレナさんにも手伝ってもらおうわ。いいわよね？」

「はい。是非やらせてください。お願いしますっ！」

十一歳の子供が法案の作成って……。

「窓口業務を兼任じゃちょっと大変そうね。そこはルイス君にやってもらいましょ」

え？

「はい。よろしくお願いします。ルイスさんっ！」

なんてこった……

一ヶ月後、三人が作成した草案は王国議会で却下された。当然だろう……。でも何故か、定数百五十に対し、賛成三十、反対七十、棄権五十……。三十人も賛成している……。

「長期的な問題ってのは、若い人にしか危機感が出てこない。常識を打ち破ってもどうにかしなきゃってレベルの使命感は出世欲や名誉欲なんかからはでてこないわ。ま、学校秀才のままじゃ国家国民を救う法案と言うのは難しいわね。可決されなくても、一度こういう案が提出されたと言う事自体に意味があったりもするのよ」

誰に局長は言ってるんだろ……。机に座って、コーヒー飲みながら上に向かって……。

## 増税と少子化対策（後書き）

コメディイーって路線を半分ぐらい諦め始めてたり……。ちよつと社会派っぽいノリで行きますよ。

ルイス・デ・レオンのキャラクターは「エリート意識は高くて常識人のつもりだけど、実は面白い人」ですかね。一番そんな役回りの人物にしていこうかと思えます。

鼻持ちならないエリートなんだけど、なんだか憎めないやつにしていければいいなあと。

## 新人歓迎会（前書き）

今回の語りはエレナちゃん。時系列は少し戻って、彼女の出勤初日からになります。

## 新人歓迎会

私はエレナ・デ・トレス。今年で十一歳になったばかりです。今日からスペルファ王国首都語民局の臨時職員になりました。いつも学校と家の行き来ばかりで、あとは勉強だけ。勉強は好きだけど、本当は学塾は好きになれませんでした。

九歳で幼年学塾を卒業、中等学塾は十歳、十一歳で高等学塾を出て、ここ三年は毎年違う学塾に通ったけれども、どこに行ってもつまらない人ばかり。頭のいい人はたくさんいました。中等学塾に上がったからは、飛び級している人もたくさんいたし、名門だったし。年上によく見られるから、周りの人たちが自分より年齢が上でもあんまり気にならなかつたけど、みんな勉強ができるっただけで、ちっとも面白いことなんてなかつたし、勉強以外はあんまり賢いとは思えませんでした。

でも、なんだかここは違う気がする。勉強じゃなくてお仕事をしに来ているわけだし、今までで一番歳の離れた人ばかりのところだけど、みんな賢い人ばかり。そして、とっても面白いんです。まだ、ちよつとしか知らないけど、個性的な人たちばかりで、私の全く知らないこともいろいろ経験出来そうです。

今はお昼休み。午前に受付のお仕事を教えてくれたレオノーラさんが近所の定食屋に連れてきてくれました。受付のお仕事は忙しくなると結構大変そう。でも、今はだいぶ暇になったから、時間を持て余すこともあるそうです。余裕がある時は、みなさんからいろいろなお話を聞いたり、護民局のお仕事をの考えたりしたいと思いません。

「エレナちゃん」

「はい。なんででしょう？レオノーラさん」

レオノーラさんはとつても優しくて、キビキビしていて素敵な人です。まだ新人だからとか、飛び級するほど優秀じゃなかったとか言っているけど、どんななお仕事もちゃんとそつなくこなしちゃうんです。それにみんながすつごく難しい話をしている時に、驚くようなアイデアを出して、話をまとめてしまうこともあります。おかげで私もここで働けるようになりました。

「ここで働けるようになってうれしい？」

「はい！とても嬉しいです。叔父様のこともあるけど、私、もう学塾とかに飽きちゃってて。これから毎日どんなお仕事が出るのか楽しみです」

「そう。私も貴方みたいな後輩ができて嬉しいわ。半年だけだけどね。でもね……」

「はい？」

「ここは確かに優秀な人がたくさんいるけど、変な人も多いからあんまり人格的影響を受けすぎないように気をつけてね」

「どういうことだろう……」

「例えばミツシエル先輩」

「素敵な方ですよね」

なんだかかっこいいし、ものすごく頭いいし、一つ一つの仕草に見とれてしまいます。あ……何いってんだろ……。

「……あのね、彼は確かに天才的。見ようによっては多少ハンサムに見えなくもない。私は親戚で幼馴染だからよく知っているわ」

「ご親戚なんですか？」

「ええ。従兄弟になるわ。とにかく、頭はいいけど、あなたぐらいの若い子が接触しているとあんまりよくないわ。深く関わらないように気をつけてね」

「・・・」

つまんない・・・なんでだろ・・・ひよつとして・・・。

「ひよつとして・・・レオノーラさんって・・・」

「ん？」

「ミッシェルさんのこと好きなんじゃ・・・」

あ、レオノーラさん。顔真つ赤だ・・・。

「ぶつ・・・そ、そんなわけないわよ！どつからそんなふうには？」

「いえ・・・なんとなく・・・違うんですか？」

「私とあの人は単なる腐れ縁の幼馴染！特別な感情なんて一切ないわ」

「す、すみません・・・」

あれ、なんか私・・・ほつとしている・・・。

「それにしても・・・ほんと変わった人ばかりなのよね・・・」

「そんなにですか？」

「護民局は王国政府の事務局では一番規模は小さくって、臨時職員をあわせても二十名程度だけど、かたっぱしから変人ばかりよ」

面白い人が多いって言うのはわかるんだけど・・・

「ミッシェルはまあ言うに及ばず、我褒めの癖が強いルイス・デ・

レオン先輩、ライフワークが排泄物の成分分析だつていうペドロ・アサーニヤ技官、普段は大人しいのにお酒を飲むと豹変して極度のエロキャラに化けるペネロペ・サウラ主計官・・・まあ、もう、一癖も二癖もある人達ばかりよ・・・まともなのなんて私ぐらいかも・・・」

「あら？ルシア局長は？」

「うーん・・・局長も局長で・・・いろいろとね・・・そもそもあの人がそういう変人達を集めているんだから・・・エレナちゃん・・・」  
「はい？」

あれ？なんかレオノーラさんが涙浮かべてる。なんか私の手をとってプルプル震えてるんだけど・・・。

「ありがとう・・・もう・・・この半年、変人にはすっかり囲まれていて、そのうち正気が保てなくなるんじゃないかと思っていたわ！」

「え、あ、はい。よろしくお願いします」

ふーん・・・レオノーラさんも優秀な人だと思っただけど、レオノーラさんみたいな人が常識的ってことなのかな・・・。

午後からはお客さんは2、3人だけで、窓口業務は楽でした。私が対応したけど、レオノーラさんが後ろで見えてくれたから、安心してできたと思います。今日は夕方からみんなで私の歓迎会をやってくれることになりました。

「さあ、みんな！もう知っているとと思うけど、今日から臨時職員として働いてくれることになった、エレナ・デ・トレースさんよっ！

どんなに大人っぽく見えたって、まだ純真な十一歳女の子ですからね！手を出したりしないようにっ！」

「はっ！」

何故か男の人達が敬礼で答えています。『手を出す』ってなんのことだろ？

「それじゃ、新しい仲間を迎えたことを祝って乾杯は……ミツシエル君っ！」

でたっ！ミツシエルさんが床の上でスピンしているっ！なんかいつもより回ってる！

「この美しく賢明なエレナ嬢を迎えて護民局はますます陣容を固め発展を遂げることでしょう！さあっ！我々と若いエレナ嬢の未来をたたえてっ！」

ピタッと止まって、ここまで高らかに演説したところで、必殺のトリプルアクセルを決めて、ピタリとポーズを決めてくれました！

「乾杯っ！」

「かんぱーいっ！」

私はもちろん未成年なので、桃の果汁で乾杯です。

すっごく楽しいです。お父様や叔父様に連れられて、パーティに出たことはあるけど、お金持ちの人ばかりで、中身のない会話ばかりで、こっちの方がずっといいです。みんな酔っ払って面白いこと言ってくれたり、いろいろ教えてくれたり。

「エレナちゃん・・・変な男にひっかかっちゃだめよお。この男たちはまあ女日照りばかりだからねえ・・・私一人じゃ男どもの欲求不満を解消してあげる余裕はないし、そのうちレオノーラに手伝わせるつもりなだけどさ・・・でも、流石にアナタは早すぎわ・・・」

「？」

よく分からないのこを言ってきたのは、主計官のペネロペさん。

「サウラ主計官っ！子供に何吹き込んでいるんですかっ！」

なんか怒って私をペネロペさんから引き剥がしたのはやっぱりレオノーラさん。

「じゃ、そろそろあんたが協力してくれるう？」

なんだか怪しい視線でレオノーラさんを見ながらペネロペさん。

「これ以上、局内の風紀を乱さないでよね。サウラ主計官」

ペネロペさんの頭をコツンと叩いたのは、素敵な微小を浮かべたルシア局長。かつこいい・・・。

歓迎会は二時間ぐらいで終わりました。レオノーラさんが『深夜に未成年を連れ回すことなんて許されませんっ！』って言ったたら、男の人達がなんだかブーイングしていました。なんかレオノーラさんってみんなのお母さんみたい。と思っただら・・・

「非常識な天才たちの中に常識的な秀才が混じると一番賢いのは常識的な秀才よね。こういう人がいないと組織としてまとめるのが大変だし。ま、ただの学校秀才じゃこうは行かないんだけどね」

よくわからないけど、ルシア局長が独り言を言っていました。

そんな感じで、私の護民局でお仕事は始まりました。これから前日どんなことがあるか楽しみです。いろんな人達に囲まれて、退屈だけはしないと思います。

## 新人歓迎会（後書き）

今回はオチも社会ネタもなしっ！

エレナについては、モデルがいます。と言っても、ちょっと見たことがあるという程度の人。近所の居酒屋で見かけた女の子なんです。が、家族連れで来ていたその子が帰ったあと、マスターが「あの子いくつにみえた？」と聞くので、見たまま「17歳ぐらいですか？」と聞いたたら、なんと11歳だったと・・・。

まあ性格とかは知らないの、普通に「天才少女」のイメージですが、原案は正しくその子から来ています。「転載だけど天然」にしていければいいかなあとか・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3129/>

---

ミッシェル君のオシゴト

2010年10月13日20時02分発行